

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 吉野源三郎『君たちはどう生きるか』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。
(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cggd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張っております。)



第 60 回のツイキャス読書会の課題図書は、吉野源三郎さんの『君たちはどう生きるか』です。
読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

「君たちはどう生きるか」についての感想

おじさんのノート【偉大な人間とはどんな人か—ナポレオンの一生について—】のページにて「世間には、悪い人ではないが、弱いばかりに、自分にも他人にも余計な不幸を招いている人が決して少なくない。」と記されていましたが、これが後程コペル君を指すことになってしまいました。上級生たちに友達の北見君が目を付けられていて、もし北見君が殴られそうになった場合はみんなで殴られようという約束をしましたが、いざそうなったときにコペル君は怯んでしまっみんなを裏切る事になってしまいました。そしてこの事で非常にコペル君は苦しみますが、コペル君は、グダグダと言いつをを考えてしまいます。しかし最後には意を決して北見君たちへ、きちんと謝罪の手紙を書きました。コペル君は殴られるのが恐ろしくて逃げた弱さがありましたが、そのことで友達を裏切ってしまった事に対して反省して正直に謝りました。ここで言いつをしてしまう弱さが出てしまうともっと不幸になっていたと思うし、おじさんが言いたかった弱さとはこっちの方を指しているのかなと思いました。

最後に、コペル君がおじさんのノートへの感想文を書くのに苦戦するシーンにとっても共感しました。

(おわり)

『君たちはどう生きるか』感想文

この本は自分が高校生くらいの頃、本を買って一回読んだことがありました。

昨年(2017年)、この本の漫画版がヒットしていて、気になっていたのですが、一年の初めに読むにはちょうど良い感じがして、読むことにしました。読む前、どんな内容だったのか、そもそも当時、どうして読もうと思ったのか思い出そうとしましたが、コペル君という名前を何となく覚えていたくらいで、内容は忘れていました。

どうして覚えているかどうかを気にしているかということ、今回読んでみて、教訓的なことが書かれていることも多く、いろいろ反省させられました。高校生くらいの頃、一度は読んでいるにもかかわらず、それを活かしている感じがなくて残念に思ったからです。その頃(十数年前)は本を読んでも感想文を書くということをやっておらず、(信州読書会のような)WEB上での読書会も知らなかったのも、本を読んでも読み流してしまっていたのかもしれない。

今回読んで印象に残ったところを引用すると、

「英雄とか偉人とかいわれている人々の中で、本当に尊敬が出来るのは、人類の進歩に役立った人だけだ。そして、彼らの非凡な事業のうち、真に値打ちのあるものはただこの流れに沿って行われた事業だけだ。」

「～よい心がけをもっていながら弱いばかりにその心がけを生かし切れずにいる、小さな善人がどんなに多いかということ、おいおい知ってくるだろう。世間には、悪い人ではないが、弱いばかりに、自分にも他人にも余計な不幸を招いている人が決して少なくない。人類の進歩と結びつかない英雄的精神も空しいが、英雄的な気魄を欠いた善良さも同じように空しいことが多いのだ。」

平成も残すところあと一年4ヵ月ほどになろうとしています。自信を持って悔いのないよう一日一日を大切にしていこうと思いました。

(おわり)

「私は吉野源三郎である」

1

私は吉野源三郎だ。今回、少年向けの教育書を書いて欲しいと依頼された。しかし私は悩んでいる。どう書くべきか？ どうしたら私の伝えたい事を正しく理解してもらえるか？

かなり考えた末、今までの教育書と違う手法を思いついた。それは、小説仕立てにすることだ。主人公は読み手と同じまだ世の中や人生について深く考えたことがない中学生にする。そして彼の周りで起きる身近なエピソードを取り上げて読み手に共感を持たせ、理解させるのだ。エスコートとアドバイス役に若い叔父さんも登場させよう。

2

私は俄然やる気が出て来た。ご時世は軍国主義が勢力を強めている。今や自由な執筆もままならない。しかし、この時期だから私は書かねばならない。未来を背負う少年たちに世の中や人生を考えるきっかけを与えたい。「すべての人間が幸せな生活を送れる社会になることを目指して助力できる人生を歩んでほしい。」という私の願いを伝えたい！

3

私はまず、構成を考えた。全部で10章に決めた。

1章では、「ものの見方について」教えよう。エピソードは街をビルの屋上から眺めた時の主人公の何気ない印象を取り上げる。ここで、私は読者に「視座の転換」の重要性を教えたい。事象をいつも自分中心で見ていると、判断を誤ることがあることを、客観的にとらえることの大切さを「地動説」を例にして伝えよう。

2章では、「感動する経験の大切さ」を教えよう。エピソードは日常関わりの深い学級でのいじめを取り上げる。ここで、私は読者に「経験を通しての感動がなければ、人間や社会を真に理解した立派な人物にはなれない」ことを伝えたい。また、中学生にまだ残っている「正義感」を刺激して、「自分の考えが正しい時は主張する大切さ」も伝えたい。

3章では、「人間の結びつき」と「思考の奥深さ」を教えよう。ここで、私は読者にミルクの発見をきっかけにして、生産関係による経済の仕組みと人間の結びつきを教え、「生産者への感謝の気持ち」を伝えたい。さらに、ミルクのような身近な物でも考えを詰めていくと、驚くような発見があることを、ニュートンの話とダブらせて教え、「思考の面白さと醍醐味」を伝えたい。

(4章、5章の文は感想文が長くなるので省略します)

6章、7章、8章はこの小説の山場の章にする。

三つの章を通して「勇気」と「人間の良心的な悩みと過ちと偉大さ」を教えよう。

エピソードは、上級生と友人の間で起きた事件にからんで、主人公と友人たちが取った行動の違いから主人公が悩み苦しむ姿をメインに取り上げる。このエピソードに読者はおそらく、友人たちの善意と友情や主人公の苦悩に共感し大きく心を揺さぶられるだろう。ここで私は、「勇気のない行動が時には取り返しのない結果をもたらすことがある。」こと、「しかし誤ったことをした時はそれを素直に認めて、その後の行動で直していくことが本当の勇気であり大事である」ことを伝えたい。更に「人間は、自由に考えたり行動したりできる生き物であるから、やり直しもちろんできる。」ことを伝え希望を持って人生を進ませたい

(9章、10章の文も省略します)

遠くから聞こえてきた「おじいちゃん、朝ごはんできたよ。」の声で、私は目を覚ました。私はコタツの中にいた。部屋には薄日が差している。

どうやら、昨夜「信州読書会」に出す感想文を書き上げた後、疲れてそのまま眠ってしまったらしい。

私はカーテンを開けるために立ち上がった。そして、あくびをしながら昨夜見た、

今年の「初夢」を思い出して苦笑いをした。

「それにしてもこの本は大したものだ。作者のメッセージがこんなにしっかりと私に伝わった本は初めてだ。なんせ、読者である私と作者の「視座の転換」まで夢の中で起きたのだから。」

私は作者に心の中で敬意を表した。そして、本を大型の封筒に入れると、表側に「お年玉」と書き、孫が待っている台所へ足を向けた。

(おわり)

『君たちはどう生きるか』を読んで

歩いて歩いて
自分の疑問をどこまでも追っていく
夜中に一人目を覚まし
情熱のありかに想いをこらす
伸びてゆかずにはいられない草花の逞しさに励まされ
長いこと抱えている痛み、苦しみ、悔しさが
真理への道標になると教えられる
そして明日には
朝靄の中で鳴く鶯になろう
誰に聞いてもらおうというのではなく
ただ自分の声を自分で楽しみながら
一声鳴いては
消えゆく自分の声を聞き
ただどこかに、誰かに、
春を届けるような鶯になろう

自分という個の内面をしっかりと突き詰めて考えた生き方をしたいと思わされる本でした。個人として内面は思想的に、外面的には経済的に自立してこそ、世の中に役立つ行為が出来ると思いました。個から成熟し、家庭、そして社会に関わるという順序です。

また、世の中や自らを問い続ける個人でありたいと考えさせられました。その際に、命題の真偽や知識というものが、固定観念を前提としてあるのではなく、日常の生々しい経験と実感から、思索をし、真偽や意味を発見するというすすめ方、それが本当の意味の社会科学的認識と自分の倫理観の統合になるのだと思いました。

（おわり）

※詩では本文の文章を援用しています。

（p96、296）

「勇気が大事」

私はコペル君が最初、好きになれなかったです。

たしかに、賢いし優しい子だと思うけど友達の話に流されて一緒に上級生に殴られる事を約束して、結局逃げたしまって友達を裏切る事になってしまったからです。

コペル君は体が小さいし殴りあいの喧嘩なんてしたこともないだろうから、上級生に殴られたりしたら大怪我をして大変な事になっていたかもしれないから、逃げて良かったとも思うけど、でも、もしそうなら友達とみんなで上級生に殴られるという話になった時に、自分は友達が大切だけど殴られたりするの嫌だから他の方法で協力したいと、コペル君ぐらい賢い子なら言えたかもしれないと思ったからです。

みんなには白い目でみられるかもしれないけれど殴られる覚悟がないなら、殴られる事が怖いという気持ちを伝える勇気も必要だったと思いました。

その場の雰囲気流されて、みんなの意見に従ってしまうことはあると思うけど、出来もしないことを約束するのは勇気がないなと思いました。

その後、コペル君に出来る勇気を出して友達に手紙で謝っていて、自分のやった事を悔やんでいたのが本当に良い子だなと思いました。友達の北見くん、水谷君、浦川くんが、許してあげて優しい子達だなと思ったし、きっと日頃のコペル君の行いがそうさせたのかなとも思いました。

コペル君も勇気を出さないと、本当に大切なものを失ってしまうという事が分かって良い経験が出来たんだと思ったし、自分がよくない事をしてしまったという後悔をして思い悩んだ事がこれから生きていくなかで大切になってくるのだと思いました。

(おわり)

「北見君になれない私はどう生きる？」

あたり前のようにひとは言う。

「弱いものいじめをしてはいけない」と

私は物語の中での一幕、「油揚げ事件」のところで涙がポロポロとでてきてしまった。浦川君をからかう山口君に北見君が飛びかかるシーンだ。

弱いものいじめを見過ごさない北見くんの気持ちを私はとても尊いと思った。それは目立ちたい訳でも、いい人ぶりたい訳でもなく、北見君が純粹に心から湧きでた優しさと強さだと思う。

涙がでてしまったのはあたり前の事が守れない現実社会を私達大人が生きていて、北見君のような勇気を持ってない自分自信を後ろめたく思えたからかもしれない。雪合戦の場面でコペル君が友達との約束を恐怖に負けて守れなかったように、頭では理解していてもその場面に身をおけば、なかなか実行に移すことは難しい。

物語の中で叔父さんが言っていたように人と人は綱目のように繋がっている。信頼できない繋がりの中では、周りは我関せずで、正直者がバカを見る、要領の悪い奴、と理不尽な結果になりかねない。大人はみんな怖いのだ。それは私も同じだ。

しかし私は、人は本来、弱い者にたいして思わず手を差し伸べたくなるものだと信じている。互いを思いやる人間関係は人が生きる意欲につながる。明日も生きていこうとする望みとなる。これは人間にしかできない事だ。

私が北見君のような勇気を持ってないとしたら、どう生きたらいいのだろうか？

私には大きな事はできない。けれど北見君がピンチの時に浦川君と水谷君が寄り添ったように、日常での少しの勇気と信頼関係を積み重ね、人と人との良い綱目を結んで広げて行けば、もう少し生きやすい社会が出来るかもしれない。

そしてクリスマスキャロルのスクルージが救われたように、山口君や黒川君も救われる社会になればいい。綱目で繋がっている社会の中では山口君も黒川君も自分の一部であるからだ。

(おわり)

空が重たく感じるのは気のせいであってほしい

人のあるべき道德観と、生きるための目的に真っ正面から向き合うこと。

「誠実に生きよ」という願いが、少年コペル君に諭すように書かれた物語。

時代が違うので、すべてが今に当てはまるとは思えないけれど、こういう本は、大人になってからこそ心に留めて、下の世代の少年少女たちに、やさしい語り口で伝えるべきだと思った。叔父さんのノートに書かれているような問いかけや、お母さんの「石段の思い出」は大人になればいくつか持っているだろうから。

「良心」ってなんなんだろう。いい事をすれば心が清々しくなり、その反対がなぜ自分を苦しめるのだろう。

良心は自分の中に自然と芽生えたものだと思っていたが、育った環境や人のふるまいに影響され、自分が行った経験から身に染みこんでしまうもの。染みこんだ良心は、いつでも新しく磨き、清廉としたものに入れ替え、いつだって誰かのために尽くせる心にゆとりのある自分でありたい。こんな事を書いていて気恥ずかしいが、そんな事を思った。

1937年（昭和12年）の発表。

時代は日中戦争の直前で軍国主義が日本の空を覆い隠そうとしていた。

今またこの本が求められていることに、なにか不穏なざわざわした気持ちに襲われる。

生きる道の先に不安が見えるのは、なにも戦争のためだけじゃないが、将来に希望を持たない感覚が、今と共通している気がしてならない。

改憲とか、北とか、西の国の紛争がいくつも飛び火している毎日。

国家という人格の強欲さが招く争いのせいで、世界中が暗雲に包まれている。

あのとき15歳だったコペル君たちは、その数年後、国を守るために前線へ向かったのだろう。

そう思うとやりきれなさで一杯になった。

空を仰いだとき、銀座の夕闇に降りそそいだ霧のような小さな雨粒は、

コペル君が見たときと同じく、ただそれだけで美しいものでありつづけてほしい。

その空が100メートルも200メートルもどこまでも上空に広がって、ニュートンの林檎の発見のように世界中が平和という重力でしっかり結びつけられていれど願う。戦争なんて嫌だと声を出せる大人が社会を作っているのだから。不穏な空の責任は今の大人にある。

（おわり）

『母の寄り添い』

一人前に旅立つための準備期である潤一くん、説得力のある存在として登場するのは叔父だ。亡くなった父の代わりに叔父は、親とは違う斜めの存在として、潤一君に社会を教え、励まし、しかるべき方向に導こうとする。この父性の存在感は圧倒的だ。

そんな中、小説でちょっと異色を放っているのが、友人を裏切った後悔の念にさいなまれる潤一くんを、母が自分なりにフォローする場面だ。青年時代の慟哭を、受け止める母性。

寺の石段を上る老婆に手を差し伸べることができなかった、身近な日常の経験から母が得た気づきがあった。そのとき感じた後悔を忘れないように生きていくことで深みのある生活になる。だから、どんなときにも自分に絶望したりしてはいけない。誰かがきっと知ってくれる。たとえ人間が知ってくれなくても、神様がちゃんと見ていてくださる、と。

母にとって、子どもは自分の体内から生み出された分身だ。分身だけれど、だんだんと自分の手から離れていく。つかず離れず、けれど決して目をそらさない。何があってもあなたを守りぬきます。あなたが決して私の視線を感じていなくとも、ちゃんと見ています。そんなつつましくも、たくましい母の思いが、じわじわと心に染み入ってくる。

たまたま、潤一君の母はやさしさがあふれ出てくるようなタイプだけれど、他の女性もまたいい味を出している。浦川君のお母さんは肝っ玉母ちゃんで、学校に物を申すモンスターペアレントぶりを発揮する場面が笑えた。水谷君の姉は若い闘志を秘めたツンデレお嬢さんだが、姉なりのおせっかいをやき、でこぼこしていて、快活で爽やかだったりする。

女性は、母は、いつもあなたのまわりに「星と太陽のあいだの引力」のように、今日もぐるぐる回っているのです。

(おわり)

belouga さんのブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

『アラフォーbelouga のつれづれ』 <http://ameblo.jp/clearmandarin/>

「学問や芸術に国境はない」

ガンダーラの仏像を解説しながら「学問や芸術に国境はない」という話が描かれている。読書をする意味、古典を読む意味、独学でも一生学び続けていく意味。これらの意味を、しっかり説明することは、案外難しい。ルソーではないが、人間は、自由なものとして生まれたが、しかもいたるところ鎖につながれている。主観的には自由を感じても、客観的に見れば、手かせ足かせの中にいる。学問の進んだ世界から見れば、遅れた世界のことは、手に取るようにわかる。マルクスは、「人間の解剖は猿の解剖のための一つの鍵である」と言ったそうだが、それは、そのとおりだ。

この物語に出てくる叔父さんは、まだずいぶん若い。私がこの叔父さんの立場だったらコペル君のような中学生に何か伝えることがあるだろうか。まさか本を読めとも言えない。読みたければ読めばいいし、読みたくなければ読まなくてもいいと思う。知識は実践しなければ、価値を持たない。頭に詰め込んで、世界の役に立たなければ、何の意味があるのかと思う。まず、固定観念から自由になることが、読書をして学ぶ目的だと思う。

自由を実現するためには、色々と準備がいる。水仙の根の話に出てきたが、深く根を張るから、水仙は可憐な花を咲かせている。だが、根の部分は地中奥深く隠れているから見えない。

人間の世界も、見えない根がある。学問や芸術は、見えない根が大切だ。根があつての、花である。国境を超えて世界に伝えてゆけるのは、豊かな土壌にしっかり根を張ったものが、実践段階に入って、花として咲くからだ。「鮭はどこにでもあるんですもの」という岡本かの子の『鮭』の台詞があるが、どこにでもあるということは、『鮭』はそれだけ根を張った食文化だということだ。根を張ったものは、どこまでも自由なのだ。

人間が、自由であるためには、学問を続け、根を張り、知識を実践して、花を咲かせなければならない。自由は実践しなければ、実現しない。与えられた自由は、まやかした。

(おわり)

『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714
今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343